

# 日本語における主語上昇変形と「は」・「が」

高 島 直 樹

## Subject Raising and the Particles *wa* and *ga* in Japanese

Naoki TAKASHIMA

### 1. 序

英語と日本語において、同じ現象と考えられる文間の関係がある。

- (1) I expect that Mary will come.
- (2) I expect Mary to come.
- (3) 田中は山田がばかだと思っている。
- (4) 田中は山田をばかだと思っている。

*Mary*, 「山田」は, (1), (3) においては埋め込み文の構成要素であり, (2), (4) においては母型文の構成要素になっている。この関係をとらえる規則として, つまり, (1), から (2), (3) から (4) を派生する規則として主語上昇変形 (Subject Raising) が提案されている<sup>1</sup>。この小論では, 日本語における主語上昇変形を認める立場で, 主語上昇変形を受ける埋め込み文における「は」・「が」の問題, そして, それと主語上昇変形の関係を中心に考察しようとするものである。

### 2. 日本語における主語上昇変形を認める根拠

2.1. Kuno (1976, pp. 24-29) は, 日本語に主語上昇変形を認める根拠として次のことを挙げている。まず, (4) においては, 「山田を」というように対格助詞「を」をとっており, 「山田」が埋め込み文の主語の位置にあるものではないこと, 第二に, 日本語では語順が比較的自由であるために, (5) から (7) の文に見られるように, 副詞は文中の様々な位置にあらわれる。

- (5) 愚かにも, 山田はそれを知らなかった。
- (6) 山田は, 愚かにも, それを知らなかった。
- (7) 山田はそれを, 愚かにも, 知らなかった。

しかし, (8) から (11) の文に見られるように, 埋め込み文を持つ文においては, 母型文の構成要

1. Postal (1974), Kuno (1976) を参照。なお, Chomsky (1973) はこの変形を認めていない。

素である副詞を埋め込み文の中に入れることはできない。

- (8) 愚かにも、山田は〔田中が天才である〕ことを知らなかった。
- (9) 山田は、愚かにも、〔田中が天才である〕ことを知らなかった。
- (10) 山田は〔田中が天才である〕ことを、愚かにも、知らなかった。
- (11) 山田は〔田中が、愚かにも、天才である〕ことを知らなかった。

(8) から (10) の文の意味は同じであるが、副詞が埋め込み文の中に移動した (11) は、(8) から (10) の文とは意味が異なるからである。このことから、(12) から (15) の文における「田中が」は、埋め込み文の構成要素であると考えられる。

- (12) 愚かにも、山田は〔田中が天才だ〕と思っていた。
- (13) 山田は、愚かにも、〔田中が天才だ〕と思っていた。
- (14) 山田は〔田中が天才だ〕と、愚かにも、思っていた。
- (15) 山田は〔田中が、愚かにも、天才だ〕と思っていた。

「愚かにも」が埋め込み文の中に入った (15) は、(12) から (14) の文と意味が異なるからである。しかし、「愚かにも」を「田中を」と「天才だ」の間に入れた (19) の文が (16) から (18) の文

- (16) 愚かにも、山田は田中を天才だと思っていた。
- (17) 山田は、愚かにも、田中を天才だと思っていた。
- (18) 山田は田中を天才だと、愚かにも、思っていた。
- (19) 山田は田中を、愚かにも、天才だと思っていた。

の意味と異なることから、(16) から (19) の文における「田中を」は、埋め込み文の構成要素ではなく、母型文の構成要素であると考えられる。第三に、かきませ規則 (scrambling rule) と呼ばれる規則によって、(20) の a, b の文に見られるように、文中の主語でない要素を主語の前の位置に移すことが可能である。

- (20) a. 山田は森田に田中を紹介した。
- b. 田中を、山田は森田に紹介した。

しかし、埋め込み文の主語を母型文の主語の前に移すことはできない。(21) と (22) の文では、意味が異なるからである。

- (21) 山田は〔田中が天才である〕ことを知らなかった。
- (22) 田中が、山田は天才であることを知らなかった。

そこで、(23)、(25) a の文について考えてみると、(23) にはかきませ規則を適用して (24) を派

生することができないのに対し、(25) a にはこの規則を適用して (25) b を派生することができる。

- (23) 山田は田中が天才だと思っていた。  
 (24) 田中が、山田は天才だと思っていた。  
 (25) a. 山田は田中を天才だと思っていた。  
       b. 田中を、山田は天才だと思っていた。

このことから、(23) の文の「田中が」は埋め込み文の構成要素であり、(25) a, の「田中を」は母型文の構成要素であると考えられる。第四に、次の (26) から (29) の文について考えてみよう。

- (26) 誰かがみんなを見張っていた。  
 (27) 誰かが〔みんなが死んだ〕ことを知らなかった。  
 (28) 誰かが〔みんながばかだ〕と思っている。  
 (29) 誰かがみんなをばかだと思っている。

(26) の文は、「みんなを見張っている誰かがいた」という意味の他に、「それぞれの人に対して、その人を見張っている誰かがいた」という解釈も可能である。しかし、埋め込み文を持つ (27) の場合には二番目の解釈はできない。同様に、(28) の場合にも最初の解釈、すなわち、「みんなをばかだと思っている誰かがいる」の意味しかないが、(29) の場合には、二番目の解釈、すなわち、「それぞれの人に対して、その人をばかだと思っている誰かがいる」の解釈も可能である。このことから、(28) の「みんなが」は埋め込み文の構成要素であり、(29) の「みんなを」は母型文の構成要素であると考えられる。第五に、(31) の文において、「彼」が「山田」を指示する時には、

- (30) 山田<sub>i</sub>は自分<sub>i</sub>を批判した。  
 (31) \*山田<sub>i</sub>は彼<sub>i</sub>を批判した。  
 (32) a. 山田<sub>i</sub>は〔自分<sub>i</sub>がみんなにきらわれている〕ことに気が付いていない。  
       b. 山田<sub>i</sub>は〔彼<sub>i</sub>がみんなにきらわれている〕ことに気が付いていない。

(31) は非文法的な文であること、そして、(32) においては、「自分」、「彼」両方が可能であることから、再帰化変形は主語と目的語の間では義務的であり、母型文の主語と埋め込み文の主語の間では選択的な規則と考えられる<sup>2</sup>。そこで、次の (33) から (36) の文をみれば、(34) と (36) の文法性の違いは、

- (33) 山田<sub>i</sub>は〔自分<sub>i</sub>が天才だ〕と思っていた。  
 (34) ?山田<sub>i</sub>は〔彼<sub>i</sub>が天才だ〕と思っていた。  
 (35) 山田<sub>i</sub>は自分<sub>i</sub>を天才だと思っていた。

2. (32) におけるように再帰化変形が選択的であるのは、母型文と埋め込み文の主語の間にだけ限られるものではないと考えられる。例文 (75), (77), (79), (81), 及び注 (14) を参照。

(36) \*山田<sub>i</sub>は彼<sub>i</sub>を天才だと思っていた。

(34) では「彼が」は埋め込み文の主語であり、(36) の「彼を」は母型文における目的語であると考えることによって説明が可能である。

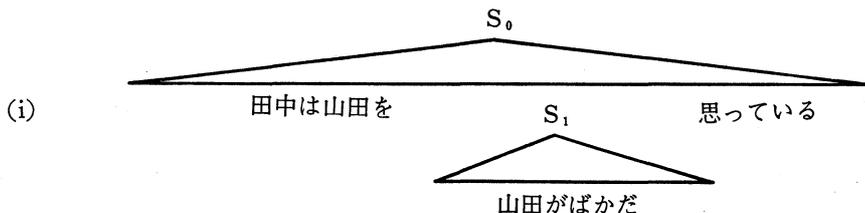
2.2. 以上の Kuno (1976) の議論から、(3) の「山田が」は埋め込み文の構成要素であり、(4) の「山田を」は母型文の構成要素であると考えられる。そして、この小論では、(4) の文は(3) に主語上昇変形(埋め込み文の主語を母型文の目的語に上昇させる変形規則)が適用されて派生されるものとする<sup>3,4</sup>。

### 3. 主語上昇変形と埋め込み文における「は」・「が」

3.1. まず、Kuno (1972) における埋め込み文の「は」、「が」の分析をみる。Kuno (1972) は、埋め込み文における主語の消去という現象を考察することにより (42), (43) の仮説を提案している。

- (37) a. 僕は忙しい。  
 b.\*僕が忙しい。  
 c. ジョンは〔 $\phi$  忙しい〕と言っている。  
 d.\*ジョンは〔自分/彼が忙しい〕と言っている。
- (38) a. 僕は家族の中で一番忙しい。  
 b. 僕が家族の中で一番忙しい。  
 c. ジョンは〔 $\phi$  家族の中で一番忙しい〕と言っている。  
 d. ジョンは〔自分が家族の中で一番忙しい〕と言っている。
- (39) a.\*僕はメアリーをなぐった。ビルがなぐったのではない。  
 b. 僕がメアリーをなぐった。ビルがなぐったのではない。  
 c.\*ジョンは〔 $\phi$  メアリーをなぐった, ビルがなぐったのではない〕と言った。  
 d. ジョンは〔自分がメアリーをなぐった, ビルがなぐったのではない〕と言った。
- (40) a. 僕は大学生だ。  
 b.\*僕が大学生だ。  
 c.\*?ジョンは〔 $\phi$  大学生だ〕と主張している。  
 d. ジョンは〔自分が大学生だ〕と主張している。

3. (4) の文は (i) の構造に同一名詞削除変形 (Equi NP deletion) が適用されて、埋め込み文の「山田が」が削除されることにより派生されるとする議論があるが、これに対する反論については Kuno (1976, pp. 29-39) を参照。



4. 英語においては、埋め込み文の主語の位置から母型文の主語の位置への上昇変形も提案されている (Rosenbaum (1967), Postal (1974)) が、井上 (1976) は、日本語ではこの規則は今までのところ提案されていないと述べている。

- (41) a. 僕は1940年に生まれた。  
 b.\*僕が1940年に生まれた。  
 c. ジョンは〔 $\phi$  1940年に生まれた〕ことを伝えた。  
 d. ジョンは〔自分が1940年に生まれた〕ことを伝えた。

(37) b. d., (39) a. c., (40) b., (41) b. の\*は、コンテストなしに考えた場合は容認不可能であることを示す。(37)においては、a. が埋め込み文になった c. では埋め込み文の主語は義務的に消去される。消去されなければ容認不可能な d. になる。(38)においては、b. が文法的な文であるのは、(37) b. とは違って総記 (exhaustive listing) の対象となる範囲が「家族の中で」によって示されているからである。そして、a. b. それぞれが埋め込まれた c., d. において、c. では埋め込み文の主語を消去できるが、d. では消去できない。(40)においては、今までの議論で言えば容認不可能になるはずである d. は、容認可能な文である。そして、埋め込み文の主語が消去された c. は、d より容認可能性が下がる。(41)においては、埋め込み文における主語が消去された c. も、消去されない d. もともに容認可能な文である。以上のことから、Kuno (1972, p. 295) は次の仮説をたてる。

- (42) The thematic NP-*wa* in the subject position in embedded clauses becomes NP-*ga* obligatorily. In other words, given NP-*ga* as subject of an embedded clause, its source is either NP-*ga* or NP-*wa*.  
 (43) In embedded clauses, NP-*ga* as subject cannot be deleted under identity with the matrix sentence subject if its source is NP-*ga*. It may or may not be deleted (subject to as yet unknown constraints) if its source is NP-*wa*.

すなわち、埋め込み文においては、主題の「名詞句+は」は義務的に「名詞句+が」に変えられる。そして、この「名詞句+が」を消去する変形は、義務的に適用されなければならない場合 ((37) c.), 選択的な場合 ((40) c., (41) c.), 適用できない場合 ((39) c.) があり、この規則の適用に関する制約は今のところわからないと言う。そして、埋め込み文の主語である「名詞句+が」が「名詞句+は」から派生されたものでなく、もともと「名詞句+が」である場合は、それが母型文の主語と同一指示であっても消去できないということである。そして、(42) の仮説は (44) b. の容認不可能を説明することができる。

- (44) a. ジョンはその本を読んだ。  
 b.\*これは〔ジョンは読んだ〕本です。  
 c. これは〔ジョンが読んだ〕本です。  
 d. これは〔ジョンは読んだがメアリーは読まなかった〕本です。  
 (45) 君は〔太郎が日本語ができる〕ことを知っていますか。

(42) の仮説により、埋め込み文に現われる「は」はすべて対照の「は」であることになる。更に、久野 (1973, p. 33) は、主題の「は」と中立叙述・総記の「が」の区別は埋め込み文では中和され、次の (45) の「太郎が」の「が」には総記の意味がないと言う。

3.2. 以上見たように、Kuno (1972), 久野 (1973) は、コンテキストを抜きにした容認性の判断に基づいて、埋め込み文における「は」, 「が」に対する仮説を提案していると考えられる。本論では、コンテキストを考慮に入れる立場から、この仮説を、主語上昇変形を受ける埋め込み文を持つ文を対象に検討する。

- (46) a. 太郎は [次郎  $\left\{ \begin{array}{l} \text{は} \\ \text{が} \end{array} \right\}$  ばかだ] と思っている。  
 b. 次郎はばかだ。  
 c.\*次郎がばかだ。

Kuno (1972), 久野 (1973) の分析に従えば、(46) c. がコンテキストなしには容認不可能な文であることから、a. の「次郎が」は「次郎は」に「は」→「が」転換規則が適用されて派生される。そして、この「が」には、述語が状態述語 (stative predicate) になっているにもかかわらず<sup>5</sup>、総記の意味がないということになる。a. の「は」がそのまま残るのは、対照の「は」の時だけである。つまり、a. の「は」には主題の意味がないことになる。しかし、コンテキストを考慮に入れば、(46) a. の文の「次郎が」の「が」は総記の意味を持ちうる。今問題にしている者、例えば、次郎、三郎、四郎が存在するコンテキストの中では、「次郎だけがばかだ。ばかなのは次郎だ、と太郎は思っている」という意味を持つと考えられる。すなわち、「太郎はある人がばかだと思っているが、それは次郎だ」の意味である。勿論、「次郎が」の「が」が中立叙述の意味を持つ場合も可能である。

3.3. 次に、主題の「は」は埋め込み文の主語の位置では「が」に変わるという Kuno (1972), 久野 (1973) の仮説の検討に入る前に、主題の「は」、対照の「は」、総記の「が」について述べる。Kuno (1972), 久野 (1973) は、主題、対照の「は」の持つ機能の違いについては述べているが、共通点には触れていない。北原 (1976, pp. 75-78) が述べているように、「は」の本義はとりたてである。そして不特定多数の中からとりたてが主題の「は」であり、特定有限数の中からのとりたてが対照の「は」である。とりたてという機能をその本義として、主題の「は」と対照の「は」が共通に持っていることから、主題の「は」か対照の「は」かという問題に対する母国語話者の微妙な判断の違いがでてくると考えられる。例えば、(47) において、「本は」と「勉強は」の「は」が対照

- (47) 私は週末には本は読みますが、勉強はしません。

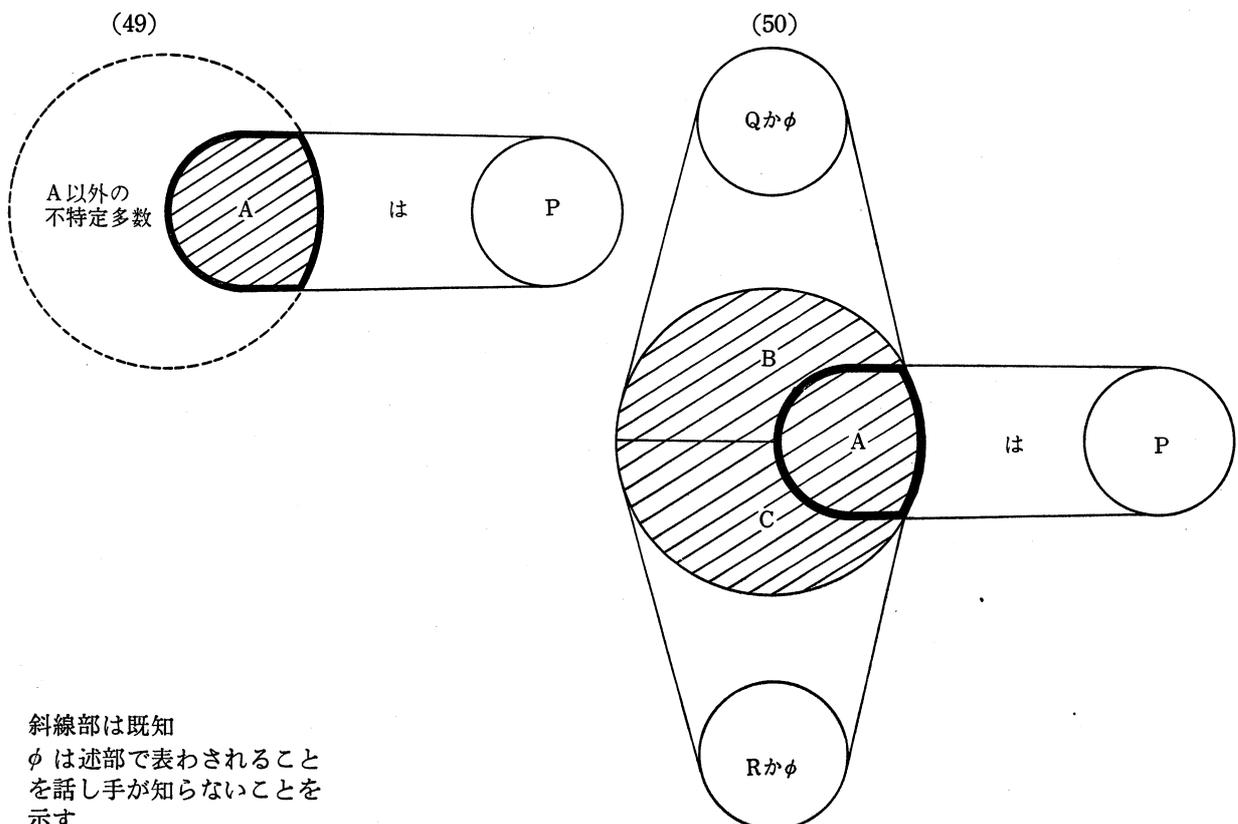
の「は」であることは、はっきりしているが、問題は「私は」、「週末には」の「は」である。久野 (1973, pp. 30-31) は、「一つの文には、ただ一個の主題しか現われ得ない。もし一つの文の中に、二つ或いは、それ以上の「ハ」が現われる場合には、最初の「ハ」だけが主題を表わし、残りは対

5. (i) の例のように、状態述語と共に使われる主格助詞「が」を伴った主語は、総記の意味を持つ。(Kuno (1978), p. 250) ただし、述語が状態述語であっても、主語に数量詞が含まれる (ii) のような時には、中 (ii) この学校の学生の大部分が独身です。  
 立叙述の解釈も受けうることを Kuno (1972, p. 275) は指摘している。

照を表わす」と述べている。しかし、(47)については、久野自身も、「週末には」は比較対照の意味合いが極めて強いと述べており、比較対照の意味しかないとは言っていないところに、主題の「は」と対照の「は」についての微妙な判断の揺れが見られる。ここで、もう少し突っ込んで考えてみると、主題の「は」は不特定多数の中からとりたてであるというのは、述部はとりたてられたものについて述べるということであり、それ以外の不特定多数については何ら関係しない。すなわち、無関心であるということである。そして、主題としてとりたてられるものは、話し手が、聞き手が知っていると考えているものである。例えば、(48)の「は」が主題の場合、「私」以外の何者につ

(48) 私は昨晚推理小説を読んだ。

いても述べておらず、「私」についてのことだけを述べている文である。それに対して、特定有限数の中からのとりたてである対照の「は」は、「は」によってとりたてられたものだけではなく、それ以外の特定有限数についても、同時に、述べるものである。例えば、太郎、次郎、三郎が同居しており、太郎が(48)の文を言ったとしよう。「は」が対照の「は」の場合には、(48)の文は「太郎が推理小説を読んだ」ことだけではなく、更に、「次郎、三郎は何か別のことをしていたか、あるいは、何をしていたのか知らない」ことを意味する。これを図示すると、主題の「は」は(49)、対照の「は」は(50)になる。とりたてられるものをA、述部をPとする。



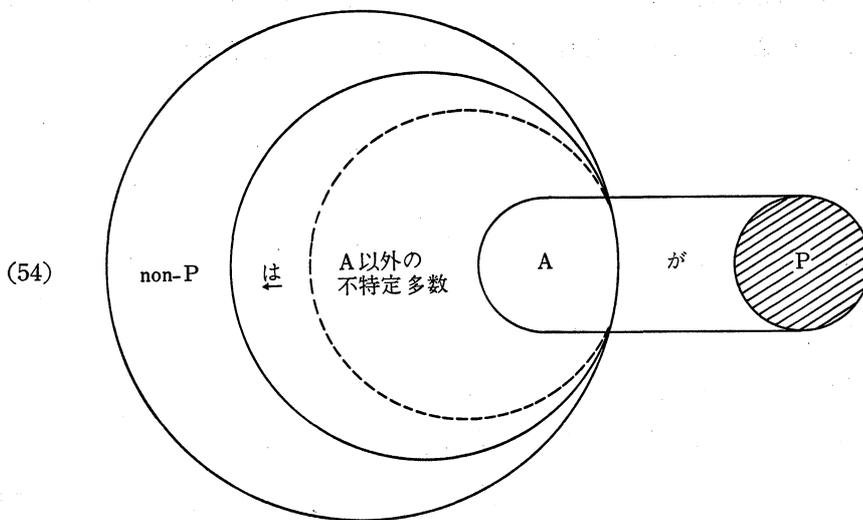
次に、総記の「が」について述べる。(51)の「が」が総記の「が」の場合、(51)は(52)に言い

- (51) 私が推理小説を読んだ。  
 (52) 推理小説を読んだのは私だ。

換えることができることからわかるように、推理小説を読んだのは不特定多数の中の私だということであり、それと同時に、私以外の不特定多数は推理小説を読まなかったということを意味する。一般化して述べると、(53)は「PはAだ」に言い換えられることから、Pであるのは不特定多

- (53) AがP。

数の中のAだ、すなわち、Pであるのは不特定多数の中のどれかということを一挙するものであり、それと同時に、A以外のものとPとの結びつきを否定するものである。既知、未知の観点から言うと、Pの部分は既知であり、Aは既知の場合と未知の場合があるが、いずれの場合もAとPの結びつきは未知である。これを図示すると(54)になる。



3.4. 北原(1976, p. 77)は、久野(1973)を批判して、一つの文に二つ以上の主題があっても論理的に矛盾するものではないと言う。そして、(47)の文について、「私は」は動作の主体についての主題であり、「週末には」は動作の行われる時についての主題であると言う。更に、二つ以上の「は」が同一文内にある場合は、最初の「は」だけが主題であり、残りは対照の「は」であるという久野(1973)の仮説も絶対的なものではないと言う。例えば、いつもある所へ行っている人が次の文を言ったとする。最初の「は」は対照であり、次の「は」は主題の「は」であると言う。ここ

- (55) 今日は私は行かない。

で、主題の「は」がいかにして文に導入されるかを考えてみる。これには三つの方法が提案されている。一つは、「は」を深層構造において導入する方法であり、二つは、「は」を変形によって導入する方法である<sup>6</sup>。変形により「は」を導入する方法の一つは、主題化によってとりたてる名詞句を文頭に転写し、「は」を付与する。例えば、(56)の「冒険小説」を主題化によりとりたてると、(57)になる。次に代名詞化、格助詞削除変形<sup>7</sup>が適用され(58)になる。次に代名詞削除変形が

- (56) 太郎が冒険小説を読んだ。
- (57) 冒険小説をは、太郎が冒険小説を読んだ。
- (58) 冒険小説は、太郎がそれを読んだ。
- (59) 冒険小説は、太郎が読んだ。

適用され、(59)の文が派生される。もう一つの変形による方法は、「は」を文中のとりたてる名詞句に付与し、次に文頭に移動させるものである。

- (60) 太郎が冒険小説を読んだ。
- (61) 冒険小説をは、太郎が読んだ。(「は」を付与、文頭へ移動)
- (62) 冒険小説は、太郎が読んだ。(格助詞削除)

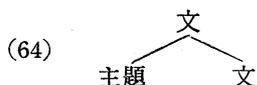
最後に、「は」を深層構造において導入する考え方では、句構造規則の展開により「は」を導入することになる。例えば、(62)の文は、(63)の深層構造に同一名詞句削除変形が適用されて派生さ

- (63) [[冒険小説]<sub>T</sub>は太郎が冒険小説を読んだ]

れることになる<sup>8</sup>。主題の「は」の生成過程については、以上の分析が提案されているが<sup>9</sup>、すべて

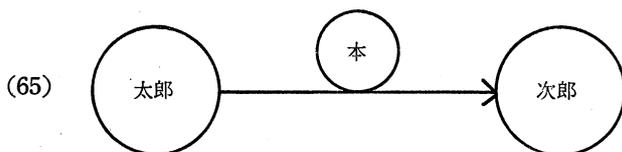
6. この変形によって主題を導入する方法は、井上(1977)に拠っている。
7. この「は」の前の格助詞削除変形は、次の例に見られるように主格、直接目的格の場合は義務的であり、位置格の場合は選択的であり、他の場合は適用できない。
  - (i) \*太郎がは冒険小説を読んだ。
  - (ii) \*冒険小説をは太郎が読んだ。
  - (iii) 公園(に)はブランコがある。
  - (iv) { 太郎からは手紙が来ました。  
\*太郎は手紙が来ました。
  - (v) { 太郎には本を与えました。  
\*太郎は本を与えました。
8. Kuno(1972)、井上(1977a)は最後の考え方をとっているが、Kuno(1972, p. 295, 脚注21.)はその根拠として次のことを挙げている。
  - (i) 太郎は彼が書いた本が今ベストセラーになっている。
  - (ii) にみられるように、主題を先行詞とする代名詞を持つ文があること。(この現象は、第二の移動変形では生成できないが、最初の転写規則では何らかの形で埋め込み文からの主題化を認めることで処理できると思われる。)更に、(ii)の文のように、それに対応する無主題文が存在しない文があることを挙げている。
    - (ii) 魚は鯛がいい。
    - (iii) \*魚が/の/で/に/etc. 鯛がいい。
9. 以下、主題を変形によって導入するという場合は、移動変形ではなく、転写変形を意味する。

に共通しているのは、最終的な構造が (64) になることである。



3.5. 北原 (1976) は、一つの文には主題は一つしか現れ得ないという久野 (1973) の一文一主題説に対して、埋め込み文を持たない文を例に、一文に二つ以上の主題があってもおかしくないと主張しているが、本論では、(3) のような主語上昇変形を許す動詞が埋め込み文を持つ場合をとり上げて、Kuno (1972)、久野 (1973) の仮説を検討する。(3)–(4) にみられる埋め込み文の主語上昇を許すのは、「思う」、「推定する」、「信じる」、「断定する」、「仮定する」、「かん違いする」、「思い込む」のような動詞である<sup>10</sup>。そして、これらは主観的な思考、判断、信念を表わす動詞であり、埋め込み文によって表わされることが真であることを前提としない非事実動詞である。本論では、これらの動詞の代表として「思う」をとりあげる。

そこで、まず次の状況を考えてみよう。

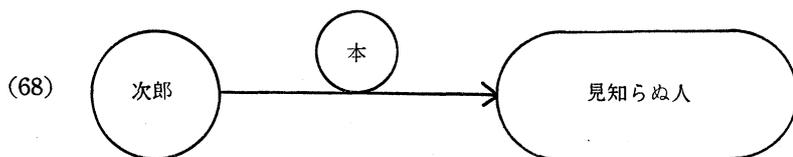


(66) 太郎  $\left\{ \begin{matrix} \text{は} \\ \text{が} \end{matrix} \right\}$  次郎に本をやった。

(67) 太郎  $\left\{ \begin{matrix} \text{は} \\ \text{が} \end{matrix} \right\}$  次郎に本をくれた。

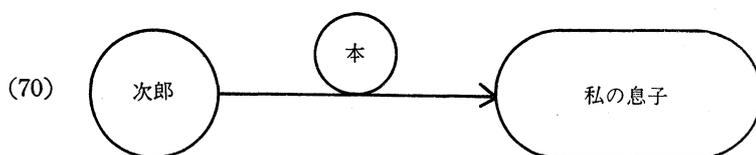
この状況を、授与動詞として「やる」、「くれる」を使って表現すれば、(66)、(67) になる。(66)、(67) の「は」は主題の場合と対照の場合、「が」には中立叙述と総記の場合がある。しかし、ここでは、この違いは問題にしないので、3.6. では主題の「は」を使うことにする。この二通りの表現の違いは、話し手がどこに視点を置いているかの違いである。太郎、もしくは、客観的な中立の立場に視点が置かれれば (66) になり、次郎に視点が置かれれば (67) になる<sup>11</sup>。そして、どこに視点が置かれるかは、話し手が述べたいと思っている状況の中に存在する者に対して、話し手が抱えている心理的距離<sup>12</sup> によって決まる。例えば、(68) の状況を述べる場合、

10. しかし、これらの動詞が埋め込み文を持つすべての場合に主語上昇変形が適用できるわけではない。例えば、(i) にこの規則が適用されれば、非文法的な文 (ii) が生成されてしまう。主語上昇変形を適用で
- (i) 太郎は次郎が花子をなぐったと思っている。  
 (ii) \*太郎は次郎を花子をなぐったと思っている。  
 きるのは、Kuno (1976, p. 33) が指摘しているように、埋め込み文が形容詞か 'nominal+copula' を持つ場合に限られるようである。
11. 「やる」、「くれる」と視点の関係については、大江 (1975)、久野 (1978) の研究がある。
12. 久野 (1978, p. 134) は、これを共感度という概念でとらえ、次のように述べている。「文中の名詞句の X 指示対象に対する話し手の自己同一視化を共感 (Empathy) と呼び、その度合、即ち共感度を E(x) で表わす。共感度は、値 0 (客観描写) から値 1 (完全な自己同一視化) 迄の連続体である。」



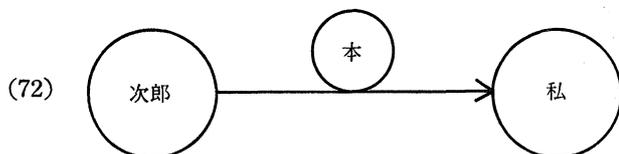
(69) 次郎は見知らぬ人に本を  $\left\{ \begin{array}{l} \text{やった} \\ * \text{くれた} \end{array} \right\}$ 。

(69) において「くれた」が不適格であるのは、見知らぬ人を話し手が身近な、親密感を抱いている存在とは考えられないからである。(70) の情況の場合には、他人である次郎に対してより息子に対して親密感を抱いているのが普通であるから、「息子」に視点が置かれた「くれた」になる。



(71) 次郎は私の息子に本を  $\left\{ \begin{array}{l} \text{くれた} \\ * \text{やった}^{13} \end{array} \right\}$ 。

(72) の情況を述べる

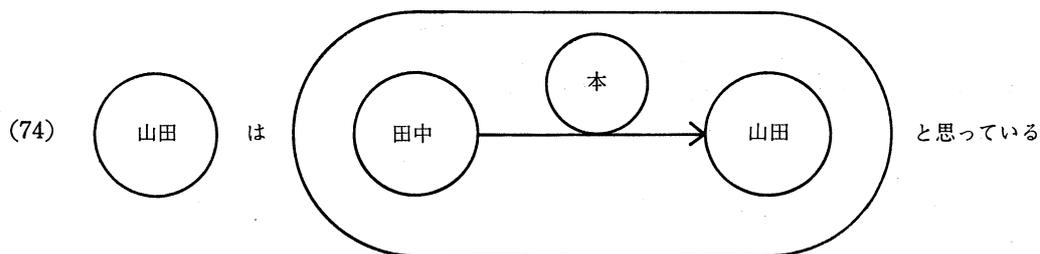


(73) 次郎は私に本を  $\left\{ \begin{array}{l} \text{くれた} \\ * \text{やった} \end{array} \right\}$ 。

(73) においては、話し手の自分自身に対する心理的距離は0であるから「やった」は不適格で「くれた」になる。上に見たように、「やる」の場合には話し手の視点が与える側、もしくは、中立的な立場に置かれた表現であり、「くれる」の場合にはもらう側に視点が置かれている。そして、上の例では視点をそれぞれの場所に置いている人（本論では、便宜上、以下視点の所有者と呼ぶ）は、話し手である。

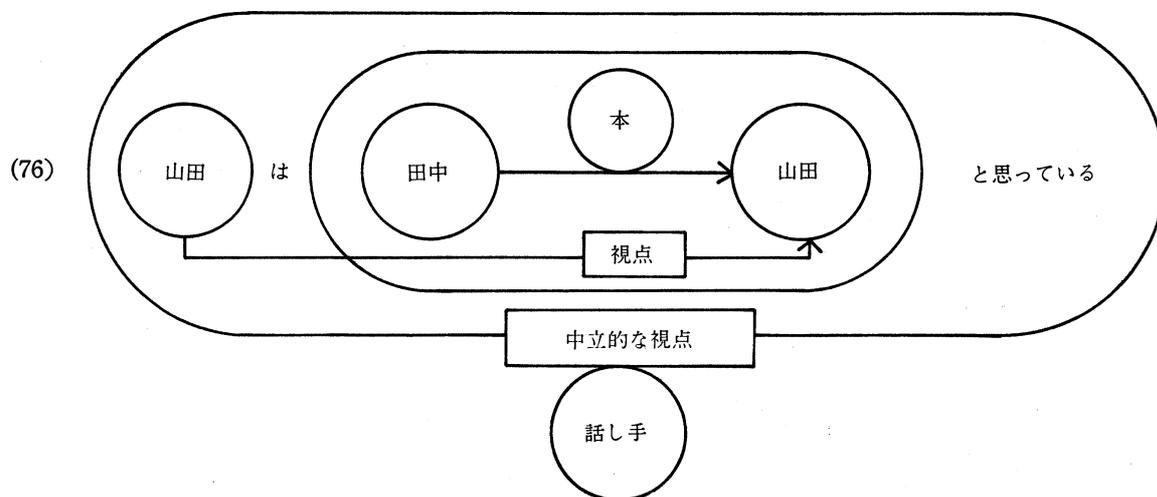
次に、埋め込み文を持つ文における視点の問題を考える。(74) の情況を考えてみよう。(74) の情況に関係している人物は、山田、田中、この情況を述べる話し手の三人である。そして、この情況を述べる(75)において、「やる」は不適格で「くれる」になるのは、本をもらう側、すなわち、山田に視点が置かれていることを示している。そして、この視点の所有者は話し手ではなく、思考者である山田である。簡単に言うと、(75) の文全体は、話し手が中立的な立場に視点を置い

13. この場合、「やった」は完全に不適格であるとは言えない。それは、次郎と息子に対して話し手が同じ程度の親密感を持っている場合、または、息子に対してより、次郎により親密感を持っている場合が考えられるからである。しかし、本論ではごく一般的の場合を考える。



(75) 山田は田中が自分に本を {くれる} / {\*やる} と思っている。

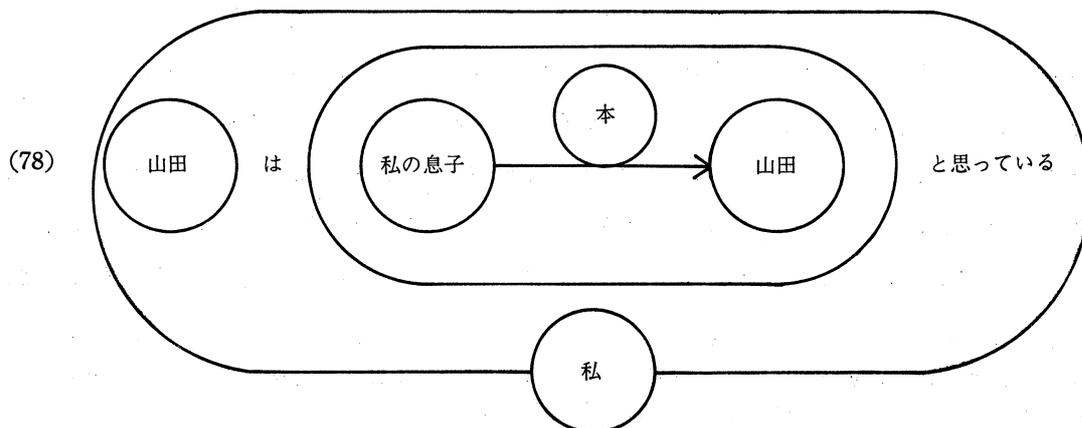
述べているのであるが、埋め込み文に対する視点の所有者は思考者である山田である。これを図示すると (76) になる。



(77) 山田は田中が自分の息子に本を {くれる} / {\*やる} と思っている。

(77) においても同じであり、自分の息子に親密感を持っているのは、話し手ではなく思考者の山田である。つまり、埋め込み文によって表わされる状況に対して、思考者が自分の息子に視点を置いているのである。

次に、本を与える人が話し手の息子の場合はどうなるであろうか。この状況を図示すれば (78) になる。



(79) 山田は私の息子が自分に本を  $\left\{ \begin{array}{l} \text{くれる} \\ *やる \end{array} \right\}$  と思っている。

もし埋め込み文によって表わされる情況だけを述べる場合には、(80)の文になる。この場合には、

(80) 私の息子が山田に本を  $\left\{ \begin{array}{l} \text{やる} \\ *くれる \end{array} \right\}$ 。

「くれる」は不適格となり、「やる」になるが、(78)の情況を述べる(79)では、逆に、「やる」が不適格となり、「くれる」となる。これは、埋め込み文に対しては話し手の視点よりも思考者の視点が優先されることを示していると考えられる。(78)の情況において、本をもらう人が思考者の息子になる場合も同じことが言える。

(81) 山田は私の息子が自分の息子に本を  $\left\{ \begin{array}{l} \text{くれる} \\ *やる \end{array} \right\}$  と思っている。

(82) 私の息子が山田の息子に本を  $\left\{ \begin{array}{l} \text{やる} \\ *くれる \end{array} \right\}$ 。

次に、(83)から(86)の文について考える。

(83) 山田は田中が私に本を  $\left\{ \begin{array}{l} \text{くれる} \\ *やる \end{array} \right\}$  と思っている。

(84) 山田は田中が私の息子に本を  $\left\{ \begin{array}{l} \text{くれる} \\ *やる \end{array} \right\}$  と思っている。

(85) 山田は自分の息子が私に本を  $\left\{ \begin{array}{l} \text{くれる} \\ ?やる \end{array} \right\}$  と思っている。

(86) 山田は自分の息子が私の息子に本を  $\left\{ \begin{array}{l} \text{やる} \\ \text{くれる} \end{array} \right\}$  と思っている。

(87) 山田は自分が私に本を  $\left\{ \begin{array}{l} \text{やった} \\ \text{くれる} \end{array} \right\}$  と思っている。

(88) 山田は自分が私の息子に本を  $\left\{ \begin{array}{l} \text{やった} \\ ?くれた \end{array} \right\}$  と思っている。

山田と田中の間に親密な関係が存在せず、本をもらう人が話し手自身である(83)の場合は、思考者の視点から述べる「やる」は不適格であり、話し手が自分に視点を置いて述べる「くれる」が使われる。そして、本をもらう人が話し手自身ではなく、話し手の息子である(84)の場合も同じである。次に、埋め込み文によって述べられる情況の中に、思考者が親密感を抱いている者と話し手自身、あるいは、話し手が親密感を持っている者が存在している(85)、(86)について考える。(85)の場合は、思考者である山田が自分の息子、または、中立的な立場に視点を置いた「やる」より、話し手が自分自身に視点を置いた「くれる」の方が普通である。一方、思考者と本を与える人、話し手と本をもらう人の間の心理的距離が等しい(86)においては、「やる」、「くれる」は同程度にいいと思われる。次に、埋め込み文によって述べられる情況の中に、思考者と話し手、あるいは、思考者と、話し手が親密感を持っている人が存在する(87)、(88)を見てみよう。思考者と話し手が埋め込み文にあらわれる(87)の場合、思考者が自分に視点を置いた「やった」も、話し手が自分自身に視点を置いた「くれた」も同程度にいいと思われる。しかし、埋め込み文に、思考者と

話し手が親密感を持つ人が存在する (88) の場合には、思考者が自分に視点を置いた「やった」の方がいいと思われる。上で観察したことをまとめると次のようになる。思考者を T, 埋め込み文によって述べられる状況に参与している人物を G (本を与える人), R (本をもらう人), 話し手を S とする。そして、「=」は同一人物, 「≐」は左辺の人が右辺の人に親密感を持っていること, 「≋」は左辺の人が右辺の人に親密感を持っていないことを表わす。

(89)	状況に参与している者の関係	埋め込み文で使われる動詞	例文
a.	T=R, S≐G	くれる	(75)
b.	T≐R, S≐G	くれる	(77)
c.	T=R, S≐G	くれる	(79)
d.	T≐R, S≐G	くれる	(81)
e.	T≐G, S=R	くれる	(83)
f.	T≐G, S≐R	くれる	(84)
g.	T≐G, S=R	{ くれる } { ?やる }	(85)
h.	T≐G, S≐R	{ くれる } { やる }	(86)
i.	T=G, S=R	{ くれた } { やった }	(87)
j.	T=G, S≐R	{ ?くれた } { やった }	(88)

(89) から、話し手が自分、あるいは、自分が親密感を持っている人に視点を置けるのは、話し手と本をもらう人の親密度が、思考者と本を与える人の親密度より高い場合か、同程度の場合に限られるとすることができる。すなわち、e. f. g. h. i. j. の場合である。そして、g. h. i. j. を見れば、話し手の視点の所有力と思考者の視点の所有力は同じように思われる。しかし、思考者自身が本をもらう人である c., 思考者が親密感をもっている人がもらう人である a. に見られるように、この場合は、話し手と本を与える人の間に親密な関係が存在する場合でも思考者の視点になること、そして、逆に、話し手自身、または、話し手が親密感を持っている人が本をもらう人であり、思考者が与える人に親密感を持っている場合には、両方の視点が可能であることは、思考動詞「思う」が埋め込み文を持つ場合には、その埋め込み文に対しては、思考者の視点の方が話し手の視点より強いことを示していると考えられる<sup>14</sup>。

14. ここで使った例文は、すべて、埋め込み文において思考者と同一指示である名詞句には、井上 (1976) の術語を使って言えば、再帰名詞である「自分」が使われている。しかし、これらの場所には人称代名詞を使うことも可能である。「山田」を男性とすれば、次の文になる。

- (i) 山田<sub>i</sub> は田中が彼<sub>i</sub> に本をくれると思っている。
- (ii) 山田<sub>i</sub> は田中が彼<sub>i</sub> の息子に本を { くれる }  
{ \*やる } と思っている。
- (iii) 山田<sub>i</sub> は私の息子が彼<sub>i</sub> に本を { やる }  
{ \*くれる } と思っている。
- (iv) 山田<sub>i</sub> は私の息子が彼<sub>i</sub> の息子に本を { やる }  
{ \*くれる } と思っている。

3.6. 思考動詞「思う」が埋め込み文を持つ時に、視点の所有者の移動が起こるのは、思考動詞「思う」が持っている性質からくるものと考えられる。「思う」は、主観的な経験を表わす動詞である<sup>15</sup>。主観的な経験であるということは、その経験者以外の人には直接経験できるものではないことを意味する。それ故、(90)の文は容認不可能な文である。「思う」の経験者は一人称でなければならないからである。

(90) \*山田は田中が本をくれると思う。

(91) 私は田中が本をくれると思う。

しかし、この一人称の経験を当人の言ったこと、または、情況から判断して客観的に述べることは可能であり、その場合は(92)のような文になる。「思っている」という状態を表わす形にする

(92) 山田は田中が自分に本を  $\left\{ \begin{array}{l} \text{くれる} \\ *やる \end{array} \right\}$  と思っている。

ことによって客観的な話し手の叙述にしているのである<sup>16</sup>。しかし、(92)において「やる」ではなく、「くれる」が使われることからわかるように、思考者の思考内容は直接には知ることのできないものであるから、客観的な形で述べる場合においても、その思考者の視点を取らざるを得ないのである。そして、話し手の視点が変わり込みうる3.5.の(83)から(88)のような場合においても、直接話し手の視点から述べているのではなく、思考者の視点から見た情況を更に話し手の視点に置き換えて述べているのである。これは、直接語法を間接語法で述べる場合の過程と同じものと考えられる。このことは、注. 14で述べた再帰名詞と人称代名詞の違いに見られるものである。例えば、注. 14の(iii), (iv)と(79), (81)を見ると(下に例文をくり返す)

(79) 山田は私の息子が自分に本を  $\left\{ \begin{array}{l} \text{くれる} \\ *やる \end{array} \right\}$  と思っている。

(93) 山田は私の息子が彼に本を  $\left\{ \begin{array}{l} \text{やる} \\ *くれる \end{array} \right\}$  と思っている。(注. 14. (iii))

(v) 山田<sub>i</sub>は彼<sub>i</sub>の息子が私に本を  $\left\{ \begin{array}{l} \text{くれる} \\ ?やる \end{array} \right\}$  と思っている。

(vi) 山田<sub>i</sub>は彼<sub>i</sub>の息子が私の息子に本を  $\left\{ \begin{array}{l} \text{やる} \\ \text{くれる} \end{array} \right\}$  と思っている。

(vii) 山田<sub>i</sub>は彼<sub>i</sub>が私に本を  $\left\{ \begin{array}{l} \text{やった} \\ \text{くれた} \end{array} \right\}$  と思っている。

(viii) 山田<sub>i</sub>は彼<sub>i</sub>が私の息子に本を  $\left\{ \begin{array}{l} \text{やった} \\ ?くれた \end{array} \right\}$  と思っている。

そして、(iii), (iv)においては、人称代名詞を使った場合は「やる」、「くれる」の適格性に関して、再帰名詞の場合とは逆の結果になる。これは、埋め込み文における再帰名詞は視点の問題と関係していることを示していると考えられる。このことについては、3.6.で述べる。

15. 大江(1975)の術語で言えば、主観述語である。

16. 大江(1975, p. 197)は、この「ている」は「不透明の純粹主観を透明の客観に変える働きをしていると言える」と述べている。ここで使われている不透明というのは、埋め込み文の中に話し手の視点が入りこめない場合の埋め込み文とそれをとる動詞のことであり、逆に、話し手の視点が入りこめる埋め込み文、それをとる動詞を透明と呼んでいる。

- (81) 山田は私の息子が自分の息子に本を  $\left\{ \begin{array}{l} \text{くれる} \\ *やる \end{array} \right\}$  と思っている。  
 (94) 山田は私の息子が彼の息子に本を  $\left\{ \begin{array}{l} \text{やる} \\ *くれる \end{array} \right\}$  と思っている。(注. 14. (iv))

再帰名詞が使われている (79), (81) の場合は, 思考者の思考内容を思考者の視点から述べているが, 人称代名詞が使われている (93), (94) の場合には, 更にそれを間接話法的に述べているものである。それに伴ない, 話し手の視点がわり込み, 「やる」, 「くれる」の適格性が逆転するのである。

以上のことから, 主観的な思考動詞「思う」が埋め込み文を持つ場合は, 視点が二つ, すなわち, 話し手が所有者である視点と思考者が所有者である視点があると考えられる。

3.7. ここで, 本論の問題に戻って, 一文一主題という久野 (1973) の仮説を検討する。先に見たように, この仮説は, 埋め込み文においては主題の「は」は「が」に変わることを前提にしているのであるが, これを上で考えた埋め込み文を持つ思考動詞「思う」の例について考える。3.6. で見た例はすべて埋め込み文の主語が動詞「が」を取っている例であるが, 「は」を取る場合について考えてみよう。

- (95) 山田は〔田中は鈴木に本をやる〕と思っている<sup>17</sup>。

問題は, 埋め込み文の中の「は」である。これは対照の「は」の解釈しか持たないであろうか。筆者の判断では, この「は」は主題としての解釈も可能である。そして, このことは先に見た視点の問題と関係すると考えられる。つまり, 主題は, 一つの視点の所有者から見た不特定多数の中からのとりたてである。これを一視点一主題と呼ぶことにする。(95) の文の場合は, 文全体に対する視点の所有者は話し手であり, 埋め込み文に対する視点の所有者は思考者である山田であるから, 二人の視点の所有者があり, 「山田は」の「は」は話し手が「山田」を, 「田中は」の「は」は思考者が「田中」を, 不特定多数の中からのとりたてているのである。このように, 思考動詞「思う」の埋め込み文における「は」は, 思考者の埋め込み文に対する視点が保持される時には主題としての解釈が可能である。逆の言い方をすれば, 「思う」の埋め込み文における「は」が主題としての解釈が可能である時には, 思考者の視点が保たれているのである。しかし, 思考者の視点から見た埋め込み文によって表わされる状況を, 更に, 話し手の視点に置き換えて述べる場合には, 埋め込み文の主題の「は」は「が」に変わる。なぜなら, 話し手の視点からは, すでに思考者を主題としてとりたてているので, 一視点一主題の原則を破るからである。故に, Kuno (1972), 久野 (1973) の提案している「は→が」転換規則は, 少なくとも, 思考動詞「思う」の埋め込み文においては, 視点の置き換えが起こる場合にのみ適用される規則である。そして, この視点の置き換えに伴って現われる「が」は中立叙述の「が」であり, 総記・中立叙述の「が」, 対照の「は」は, 視点の置き換えが起こる時にも変化しないと考えられる。これをまとめると (96) になる。

17. 「山田は」の「は」は, 主題の場合と対照の場合があるが, ここでは主題の「は」の場合を考える。

(96)	埋め込み文に対する視点の所有者	埋め込み文における「は」・「が」			
	思考者	は (主題)	は (対照)	が (中立叙述)	が (総記)
	↓	↓	↓	↓	
話し手	が (中立叙述)	は (対照)	が (中立叙述)	が (総記)	

このように考えると、(47) の文 (下にくり返す) は、視点の置き換えが起こり得ず、話し手の視

(47) 私は週末には本は読みますが、勉強はしません。

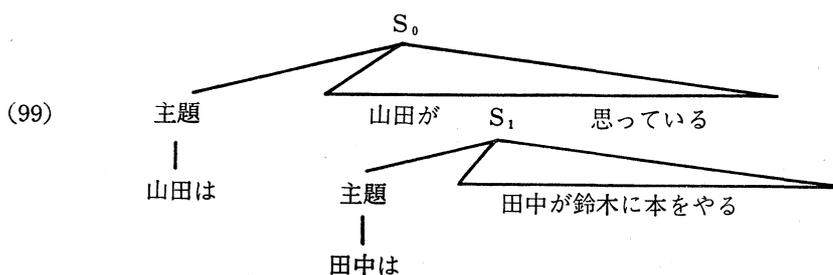
点から述べられている。それ故、「私は」の「は」が主題の時には、「週末には」の「は」は主題としての意味を持たないと考えられる<sup>18</sup>。

3.8. 次に、3.4.で述べた主題の導入の方法において、本論で述べたことを扱うとどうなるかを考える。(97)、(98)の「は」が主題の「は」の場合を、また(98)の「が」が「は→が」転換規則の適用の結果出てくる「が」の場合を考える。(97)では、文全体に対する視点の所有者は話し

(97) 山田は田中は鈴木に本をやっている。

(98) 山田は田中が鈴木に本をやっている。

手であり、埋め込み文に対する視点の所有者は思考者であることから、主題を深層構造において導入する立場を取る場合には、(97)の深層構造は、概略的に示せば、(99)になる。(98)の場合は、埋め込み文に対する視点の所有者は、思考者から話し手に置き換えられているから、(99)に「は→

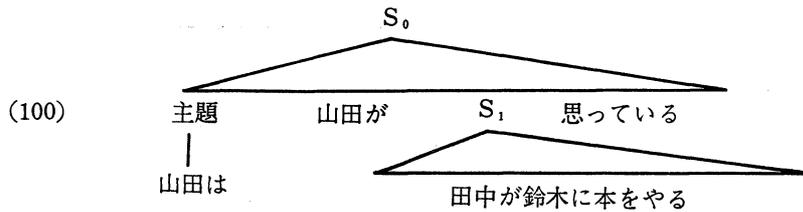


が」転換規則が適用され、更に同一名詞削除変形が適用される。その結果派生される構造は、(100)になる<sup>19</sup>。そして、(99)に  $S_1, S_0$  のサイクルで、(100)に  $S_0$  のサイクルで同一名詞的削除変形が

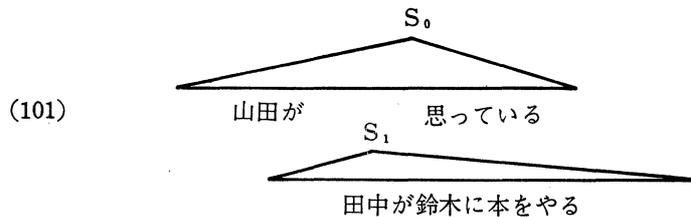
18. しかも、(47)の場合、「週末」に対して対照されるべきものは文中に現われていないが、暗黙のうちに土曜もしくは土・日曜以外の曜日と対照されており、一週七曜日、つまり、特定有限数の中からのとりたてである。

19. ここでは、思考者の「山田は」の「は」が主題の場合を考えているが、これが対照の「は」であるときには、 $S_1$ が主題を持つことができる。そして、この場合は、(i)の文が派生される。

(i) 山田は (対照) 田中は (主題) 鈴木に本をやっている。



適用されて、それぞれ (97), (98) の文が派生される。主題を変形によって導入する立場をとりなら、(97), (98) の文は (101) の深層構造を持つことになる。しかし、主題化変形を循環規則であ



るとするなら、(101) から (97) を派生することはできるが、(98), 注 19. (i) を派生することはできない。(98), 注 19. (i) を (101) から派生するためには、 $S_1, S_0$  における視点の所有者が同一である場合には、どちらか一つのサイクルでしか主題化変形はできないという制約が必要になる。また、主題化変形が最終循環規則であるとするなら、(101) から (98) は派生することはできるが、(97), 注 19. (i) は派生できない。このことから、主題は変形によって導入するのではなく、(102) の句構造規則によって深層構造に導入する方がいいと考えられる。しかし、主題を (102) によ

(102) 文→(主題)文

て深層構造に導入するにしても、視点の問題に関する何らかの意味解釈規則が必要と思われるが、今のところどう処理すべきかはわからない。

3.9. 最後に、これまでに述べた考え方に立って、主語上昇変形を考える。つまり、視点と主語

(103) 山田は太郎  $\left\{ \begin{array}{l} \text{は} \\ \text{が} \\ \text{を} \end{array} \right\}$  ばかだと思っている。

上昇変形の関係である。(103)における「太郎は」の「は」が主題の「は」の時には、それは思考者の視点からのとりたてであり、「太郎が」は、思考者の視点からのとりたてである「は」、もしくは、総記の「が」を、話し手の視点に置き換えたものである。そして、「太郎を」は、更に視点の置き換えを進めて、完全に話し手の視点になったものと考えられる<sup>20</sup>。埋め込み文に対する視点の

20. 「太郎が」の「が」には、主題の「は」が視点の移動に伴って転換をうけた「が」(中立叙述)と総記の「が」の場合があるので、これらに対して主語上昇変形が働いた結果でくる「太郎を」にも中立叙述の場合と総記の場合がある。前者の場合は「山田は太郎という人をばかだと思っている」の意味だが、後

所有者が思考者である場合には「は」、話し手である場合には「を」、その中間的な段階が「が」であると言うことができる。それ故、「が」より、「を」の方が思考者の思考内容を客観的に述べる度合が高くなると考えられる。そして、主語上昇変形は、思考者の視点が保持される「名詞句+は」には働かず、思考者の視点から見た埋め込み文によってあらわされる状況を、話し手の視点に置き換えた「名詞句+が」に働いて、完全に話し手の視点に変える働きをするものである。言わば、思考者の視点の粹となっている埋め込まれた文から「名詞句+が」を取り出すことによって、思考者の視点の所有力を除去するものと考えられる。

#### 4. ま と め

以上、主語上昇変形を受けうる思考動詞「思う」が埋め込み文を持つ場合、視点が二つあること、そして、この視点と埋め込み文における「は」と「が」の関係について考え、少なくとも埋め込み文を持つ「思う」の場合には、久野(1973)の一文一主題にかわる一視点一主題の仮説が必要であることを述べた。そして、「は」、「が」を視点との関係からみれば、思考者の視点が保持されている時には、主題の「は」が現われうること、そして、埋め込み文の主語の位置にある「名詞句+が」は、いわば、中間的な視点、つまり、思考者の視点から見た埋め込み文によって表わされる状況を、話し手の視点に置き換えたものであること、そして、主語上昇変形が働くのはこの「名詞句+が」に対してであり、これは、完全に話し手の視点からの叙述に変える働きをすることを述べた。

この小論では、埋め込み文に主語上昇変形の適用の可能な「思う」の場合のみに対象を限定したが、他の動詞の場合、また、日本語埋め込み文全般における「は」と「が」の問題は、これを足掛として、今後の課題の一つにしたい。

#### 参 考 文 献

- Anderson, S. R. and P. Kiparsky (eds.) (1973), *Festschrift for Morris Halle*. New York: Holt, Rinehart and Winston.
- Bierwisch, M. and K. E. Heidolph (eds.) (1970), *Progress in Linguistics*. The Hague: Mouton.
- Chomsky, N. (1973), "Conditions on transformations," in Anderson and Kiparsky (eds.) (1973), pp. 232-86.
- Hinds, J and I. Howard (eds.) (1978), *Problems in Japanese Syntax and Semantics*. Tokyo: Kaitakusha.
- Kiparsky, P. and C. Kiparsky (1970), "Fact," in Bierwisch and Heidolph (eds.) (1970), pp. 143-173.
- 井上和子 (1976), 『変形文法と日本語 (上)』東京:大修館。
- (1977), 「日本語に『変形』は必要か6」『言語』6巻, 3月号, pp. 102-109.
- 北原保雄 (1976), 「文の構造」岩波講座『日本語6文法 I』pp. 33-82.

者の場合は「山田は、他の人ではなく、太郎をばかだと思っている」の意味である。この二つの意味は「が」「を」に限らず、他の格助詞にもみられるものである。そして、この中立叙述と総記の区別は、後者の場合「名詞句+格助詞」の名詞句が強勢を受けることになって現われる。更に、この強勢の違いは、主題の「は」と対照の「は」にも現れ、この場合は後者の「は」の前の名詞句が強勢を受ける。

- Kuno, S. (1972), "Functional sentence perspective: a case study from Japanese and English," in *Linguistic Inquiry*, 3, pp. 269-320.
- (1976), "Subject Raising" in Shibatani (ed.) (1976), pp. 17-49.
- (1978), "Theoretical perspectives on Japanese linguistics" in Hinds and Howard (eds.) (1978), pp. 203-285.
- 久野 暲 (1973), 『日本文法研究』東京：大修館。
- (1978), 『談話の文法』東京：大修館。
- 大江三郎 (1975), 『日英語の比較研究』東京：南雲堂。
- Postal, P. M. (1974), *On Raising: One Rule of English Grammar and Its Theoretical Implications*. Cambridge, Mass.: M. I. T. Press.
- Rosenbaum, P. S. (1967), *The Grammar of English Predicate Complement Construction*. Mass.: M. I. T. Press.
- Shibatani, M. (ed.) (1976), *Syntax and Semantics*, vol. 5: *Japanese Generative Grammar*. New York: Academic Press.

(1979年10月15日受理)